

応用動物行動学の 黎明

Dawn of Applied Animal Behaviour Science in Japan

応用動物行動学会編

Edited by Japanese Society for Applied Animal Behaviour



序

2002年3月31日、「応用動物行動学会」が「ヒトと係わる動物である産業動物、伴侶（愛玩）動物、実験動物、展示動物、野生動物の行動と管理に関する基礎的・応用的研究の切磋琢磨を行い、同時に会員相互の交流・連携を図ることを目的」（会則第2条）として設立された。この学会は、ウシ・ブタ・ニワトリ・ヒツジ・ヤギといった産業動物を研究対象とする行動研究者の切磋琢磨の場であった「家畜行動に関する小集会（1984年設立）」（以後、小集会とする）を母胎として設立された。「小集会」で培われた応用動物行動学的手法と成果は設立当初より多方面から注目され、家畜行動研究者は、人の心身症研究、動物園動物の福祉性評価およびその改善、伴侶（愛玩）動物の行動制御、療法利用動物の行動管理等との連携が求められ、それへの貢献も同時に行ってきた。また近年では、野生動物による農作物や家畜への加害の制御も家畜行動学の課題となり、それらの研究も手がけてきた。すなわち、ヒトと係わる様々な動物の行動制御と飼育環境管理に対する社会的要請は多様かつ緊急となり、それらの研究者が一堂に会して議論する場が期待され、「応用動物行動学会」の設立に至ったわけである。そこで、これまでの「小集会」で話題提供された全論文と同日行われた「応用動物行動学会」設立シンポジウムで話題提供された論文をまとめたものが本論文集である。「実践動物行動学」の歴史と展開を読みとることができる。歴史的論文からは「実践動物行動学」の哲学が読みとれるが、内容的にも決して古くはなく、今日的にも十分に示唆に富む論文ばかりである。設立シンポジウムからは、今後の「実践動物行動学」の方向性を読みとって頂ければ幸いである。

今、科学は大きく変容しようとしている。日本学術会議学術体系委員会でもその変容を察知し、「大文字の第2次科学革命」との歴史認識に至っている（吉田民人、「新しい学術体系」の必要性と可能性、学術の動向2001年12月号、24-35.）。すなわち、「科学のための科学」から「人間のための科学」への変容である。「大文字の第1次科学革命」とは17世紀の「近代科学の成立」で、その後、トーマス・クーンの言う「小文字の科学革命」を繰り返し、純粋科学的「認識科学」が展開されてきたと言われている。動物行動学においても「科学のための科学」が営々と続けられ、行動生態学の成立をもって「小文字の科学革命」の終焉に近づいてきたと認識される。すなわち、動物行動学もさらなる展開のためには、応用との結合が不可欠となってきたと言える。

他方、社会からの動物行動学に対する要請も急激に高まってきている。第1は「動物福祉」への対応である。幸せな状態で飼われた家畜からの生産物を食べたいとか、動物園では幸せな生活を展示してもらいたいとか、実験動物には苦痛をなるべく与えないでほしいとかの要請が動物行動学者に求められている。第2には「野生動物と人間との軋轢」への対応である。野生動物が里地や町におりてきて、人間との軋轢を生じている。この解決にも、動物行動学者が期待されている。第3には、「ペットと人間との軋轢」への対応である。我が国ではそれぞれ1,000万頭を越すイヌやネコが飼われているが、「ペットからの飼い主への攻撃」や「ペットの家屋内での排泄行動」など、その制御も動物行動学者に求められている。このように、動物行動学自体の内部矛盾と社会からの強い要請とが相まって、動物行動学は今、「実践動物行動学」を求めていると言える。「実践」は「基礎」の方法論と成果を利用することで成立し、「実践」は「基礎」のさらなる成果への道標を提示することとなる。

本論文集を読まれることで、「大文字の第2次科学革命」のはしりとしての「実践動物行動学」に興味を持たれ、研究参加の動機に繋がることを大いに期待したい。最後になったが、本論文集を編集して頂いた「応用動物行動学会」役員（編集担当）のJRA競走馬総合研究所楠瀬良博士に心から感謝したい。

2002年11月22日

応用動物行動学会会長

佐藤泰介

（農業技術研究機構畜産草地研究所）

応用動物行動学の黎明 目次

序 佐藤衆介

応用動物行動学会設立シンポジウム記録

ヒツジ・ヤギ混成群の行動とそれを利用した家畜管理技術	安江 健	1
伴侶動物の行動治療：現状と展望（教育・臨床・研究）	内田佳子	3
野生動物と応用動物行動学会	仲谷 淳	7
動物実験と動物福祉：心理学的幸福への配慮	上野吉一	9
動物の行動を展示する	小菅正夫	11
応用動物行動学会に期待することー絶滅危惧種を保護するためにー	羽山伸一	15

家畜行動に関する小集会記録

（カッコ内の数字は掲載誌の巻,号,頁,発刊年を示す。掲載誌は25巻までは「家畜の管理」、26-31巻は「家畜管理研究会誌」、それ以降は「家畜管理学会誌」）

行動学（Ethology）および家畜行動学（Applied Animal Ethology）の出現（20,3,133-137,1985）	佐藤衆介	21
これからの家畜行動学（20,3,138-141,1985）	近藤誠司	26
「野生馬」の研究について（21,2,93-95,1985）	加世田雄時朗	30
家畜の行動における量的解析ー馬の個体関係を中心にしてー（21,2,96-100,1985）	楠瀬 良	33
鶏の性行動と脳機能（21,3,121-124,1986）	園田立信	38
鶏の採食行動ー測定法を中心にしてー（21,3,125-128,1986）	伊藤敏男	42
選択交配でつくった高・低情動反応性系ラットの野外行動（22,2,81-82,1986）	藤田 純（松沢安夫）	46
ムフロンとイノシシの社会行動（22,2,82,1986）	増井光子（松沢安夫）	47
ドイツにおける家畜の行動研究と家畜福祉（23,2,65-66,1987）	H.H.ザンプラウス（伊藤敏男）	48
カナダにおける家畜行動の教育研究（24,2,63-67,1988）	近藤誠司	50
諸外国における家畜行動研究の紹介ーイギリス他ー（24,2,68-70,1988）	佐藤衆介	55
北米ならびにヨーロッパの野生馬（再野生馬）の現状（24,2,71-72,1988）	加世田雄時朗	58
放牧および放牧行動について 1. 乳生産と集約的放牧技術（25,3,85-87,1990）	中辻浩喜	60
放牧および放牧行動について 2. 公共牧場における放牧牛の行動（25,3,88-89,1990）	早坂貴代史	63
放牧および放牧行動について 3. 放牧行動と草地ー放牧地での行動制御例ー（25,3,90-94,1990）	圓通茂喜	65
畜産領域における行動学教育の意義（26,3,96-98,1991）	松沢安夫	70
家畜行動学教育の現況（26,3,99-100,1991）	伊藤敏男	73
これからの家畜行動学教育（26,3,101-105,1991）	谷田 創	75
心理学における動物行動の研究と教育（27,2,65-67,1991）	辻敬一郎	80
日本における動物行動学の現状と行動学教育（27,2,68-69,1991）	粕谷英一	83

広島大学生物生産学部付属農場における家畜管理システム (28,2,78-80,1992)	三谷克之輔	85
自然放牧馬群・再野生馬群にみられる行動—ユルリ島・セープル島の馬— (28,2,81-83,1992)	木村李花子	88
子豚の吸乳行動—母と子のかくれた絆— (28,2,84-87,1992)	宮腰 裕	91
行動のネーミングについてのワークショップ (28,2,88-90,1992)	佐藤衆介	95
鳥獣害の行動学 (28,3,109-111,1993)	萬田正治	98
エゾシカの保護および管理について—生態学の立場から— (28,3,112-114,1993)	梶 光一	101
行動のテレメトリー (29,3,91-95,1994)	太田 実	104
携帯型電子記録装置による放牧行動の自動記録 (29,3,96-100,1994)	松井寛二	109
家畜生体情報の測定と分析—乳牛の体温の時系列解析を中心として— (29,3,101-104,1994)	柏村文郎	114
畜舎施設とウシの行動—牛床環境と横臥・起立行動との関連性について— (30,3,103-107,1995)	池滝 孝	118
施設と行動の関わり (30,3,108-112,1995)	長谷川三喜	123
Environmental management for improved livestock performance, health and well-being (30,3,113-127,1995)	G. Leroy Hahn	128
牛の周辺環境認知 (31,2,39-43,1995)	植竹勝治	143
牛群内の親和関係 (31,2,44-50,1995)	集治善博	148
放牧牛群の行動制御への試み (31,2,51-56,1995)	安江 健	155
アメリカにおける家畜行動研究・教育の現状 (31,3,85-90,1996)	中西良孝	161
粗飼料採食活動の解析方法とその応用—IMAG - DLOでの研修を踏まえて— (31,3,91-96,1996)	森田 茂	167
バヒアグラス草地に昼間放牧される黒毛和種牛群の行動： 牛群の空間分布と採食時間割合 (32,2,61-68,1996)	東山雅一・平田昌彦	173
反芻家畜の採食戦略（コロラド州立大学での研究から） (32,2,69-73,1996)	細井栄嗣	181
Social factors influencing adaptation of the ruminants to their environment and stress (33,2,55-61,1997)	Pierre Le Neindre (矢用健一)	186
Development of applied ethology —from production ethology vs welfare ethology to symbiosis ethology (35,3,74-77,2000)	Shusuke Sato	194
Future research needs in regard to farm animal behaviour for sustainable agriculture in Japan (35,3,78-80,2000)	Y. Nakanishi and M. Manda	198
哺乳類のフェロモンと行動 (36,1,1-2,2000)	森 裕司	201
反芻動物におけるストレス反応の中樞制御機構研究 (36,1,3-13,2000)	矢用健一	203
ウシの舌遊び行動に関する研究—誘発要因、個体差ならびに機能— (36,2,77-89,2000)	瀬尾哲也	214
飼育下におけるイノシシの生殖行動 (36,2,90-96,2000)	江口祐輔	227
ミヤコザサを利用した北海道和種馬の林間放牧に関する研究 (36,2,97-107,2000)	河合正人	234
馴致処理された人工哺乳子牛の行動変化とその制御 (37,1,11-18,2001)	安部直重	245

粗放的飼育管理作業の効率に關与する肉用牛の行動特性 (37.1.18-23.2001)	小迫孝実 ……………252
ヤマガラ芸の文化史と動物観 (37.3.124-128.2002)	小山幸子 ……………261
食害イノシシの行動管理 (37.3.129-135.2002)	江口祐輔 ……………266
ニホンカモシカによる食害の制御 (37.3.136-142.2002)	出口善隆 ……………273
ヒトとクマとの共生を探る－「クマの畑」－ (37.3.143-144.2002)	板垣 悟 ……………280
シバヤギにおけるストレス反応の性差 －性腺ホルモンがストレス反応に及ぼす影響－ (38.2.91-95.2002)	青山真人 ……………283
岐阜地鶏の行動特性に關する研究－コマーシャル産卵鶏との比較行動学的検討－ (38.2.96-102.2002)	伊藤秀一 ……………288
黒毛和種放牧雌牛の生活に及ぼす親和グループサイズの影響 －社会行動・維持行動・ストレス反応－ (38.2.103-113.2002)	竹田謙一 ……………295
家畜行動に關する小集会の解散にあたって－個人的な思いをこめて－ (38.2.114-115.2002)	集治善博 ……………306
編集後記	(楠瀬 良) ……………308